

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 共通語形の分布と伝播について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 隆, 熊谷, 康雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002696">https://doi.org/10.15084/00002696</a>

# 共通語形の分布と伝播について

小林 隆

(東北大学)

熊谷 康雄

(国立国語研究所)

## 1. 考察のねらいー共通語形は伝播するか?

共通語形は伝播するのだろうか?

この場合の「伝播」とは接触性伝播、いわゆる「地を這う伝播」のことである。一般に、共通語形の広まり方は、マスメディアや教育などによって、全国に一律に広まる伝播様式をとると言われる。いわゆる「空から降る伝播」である。しかし、この点に関して、佐藤亮一(1986)は、『日本言語地図』(LAJ)の「酸っぱい」の地図を例として、共通語形にも地を這う伝播が認められるのではないかと指摘した。

今回の考察のねらいは、佐藤のこの仮説を多くの地図によって検証することにある。佐藤は、1枚の地図によって仮説を提示した。ここでは、同じことが他の地図でも言えるかどうかを見ていきたい。

ただし、検討に入る前に注意しておくべきことがある。それは、「共通語形」とは何かということである。これには、「共通語と認識されている語形」というとらえ方と、「共通語と一致する語形」というとらえ方があると思われる。このうち、普通、方言地図から把握できるのは後者の意味での共通語形である。共通語形を共通語と認識しているかどうかは、意識調査を併用しないかぎり、わからない。もし、共通語形が共通語と認識されずに使用されるとすれば、それは方言語形(いわゆる俚言形)と同じ扱いになる。方言語形ならば、「地を這う伝播」を起こして不思議はない。方言地図を見たときに、共通語と一致する語形という意味での「共通語形」に一定の分布傾向が見られたとしても、取り立てて注目する必要はないことになる。

そういう問題を含むものの、佐藤の研究で注目すべきは、「併用処理」によって削除された共通語形を地図上に復活させて見せた点である。この処理によって削除された共通語形とは、話者の意識としてその語形を共通語として認識していることがわかる語形である。つまり、上で述べたもうひとつの共通語形であり、共通語と認識されている共通語形である。この共通語形にも一定の分布があることを突き止めた点が興味深い。

**併用処理とは?** : ここで、「併用処理」について解説しておこう。『日本言語地図解説一方法一』の33頁に次のようにある。

同一地点から二個以上の回答があつて、一方の標準語と一致する回答に、共通語的である・新しい・上品である・改まった場合に使う・まれにしか使わない、およびこれらに準ずる説明がある限り、原則としてその回答を地図に記載しなかつた。

これらの注記を同列に扱つてよいか疑問も残るが、共通語(標準語)と意識された共通

語形を地図から排除するという方針が読みとれる。

興味深いのは、この説明に続けて次のようにも言っている点である（同じ頁）。

標準語と一致する表現を、これらの状況でしか使わないということは、この説明を記録しなかった他の地点でも同様なことがありうる。記録のありなしを根拠に、地図に記載するかしないかを決定することは、かえって混乱をまねくと考えたためである。

ここからうかがえることは、『日本言語地図』の作成者たちは、共通語としての共通語形の回答は恣意的であり、それらを地図上に表示しても、一定の分布は現れないであろうと予想していたと思われることである。

## 2. 共通語形の分布—「併用処理」語形の復活

併用処理された共通語形は、共通語と認識されている共通語形である。それらが、もし、全国一律に現れるならば、それはいわゆる「空から降る伝播」によるものに違いない。しかし、何らかの分布傾向が現れるならば、それは「地を這う伝播」などの伝播様式を考えなければならない。

LAJDB を使って、併用処理された共通語形を復活させてみた。その結果は、後ろに掲げる図 5~20 のとおりである。これらの図には、次の情報を表示してある。

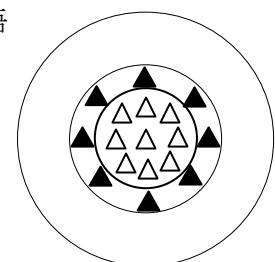
例	
項目名	かお（顔）
地図番号	106
項目番号	057
共通語形（標準語形）	KAO
白三角記号△	LAJ に表示されている共通語形（標準語形）
黒三角記号▲	LAJ では併用処理された共通語形（標準語形）

さて、これらの図を概観すると、大局的に見て、下の模式図のように、白三角記号の領域の端に黒三角記号が分布することがわかる。すなわち、併用処理された共通語形は、LAJ の共通語形の分布の周辺部に現れる。一方、併用処理された共通語形が、LAJ の共通語形の分布と無関係に全国一律の現れ方をしたり、LAJ の共通語形の分布を離れて独自の領域を形成したりするということはない。

ただし、LAJ の共通語形の分布が複雑な形状をなす場合には、併用処理された共通語形はそれらの間に現れることもある。また、LAJ の共通語形の分布が点在的である場合は、併用処理された共通語形はそれにからむように出没する場合もある。いずれも上の模式図の変形として解釈できる。

このような分布はどのようにしてできあがったのだろうか。

まず、全国一律に現れるわけではないので、「空から降る伝播」によるものでないことは明らかである。次に、LAJ の共通語形の分布と接するように併用処理された共通語形が現れるということは、前者から後者への影響があったことを物語る。その影響とは接触性伝播、つまり、「地を這う伝播」である。佐藤の仮説はこの点で妥当と判断される。



### 3. 共通語形の伝播—その伝わり方のメカニズム

「地を這う伝播」はどのように起こったのか、そのメカニズムについて考えてみる。地図に示されている地域の特徴を、共通語形の使用場面を考慮に入れて説明すると次のようになる。

X 地域 (△) : 共通語形（「共」）を下位場面（「下」）でも、上位場面（「上」）でも使用する地域。方言語形（「方」）は使わない。

Y 地域 (▲) : 共通語形を上位場面で使用する地域。下位場面では方言語形を使用する。=併用処理地域

Z 地域 (空白) : 共通語形を使用せず、方言語形のみ使う地域。

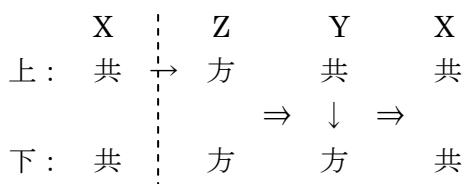
この特徴を、地域と場面のかけあわせで整理すると次のようになる。

	X	Y	Z		X	Y	Z
上:	共	囲	方		カオ	カオ	ツラ
下:	共	方	方	←LAJ の位相→	カオ	ツラ	ツラ

LAJ が見せてくれるのは下位場面での使用語彙の分布である。しかし、Y 地域においては、上位場面での使用語彙である共通語形（囲み）も合わせて回答されており、これが併用処理を受けたと理解される。

なお、下線を引いた部分の語形は、直接的には地図からわかる情報ではなく、推定形である。X 地域においては、下位場面でさえ共通語形を使用するわけだから、上位場面はもちろん共通語形と考えられる。一方、Z 地域は、もし上位場面で共通語形を使用するなら注記付きで回答がなされたはずであるが、それならば Y 地域と同じになってしまって、上位場面も方言語形とみなされる。

さて、X・Y・Z の地域は地理的に見てこのように並ぶので、その方言形成は次のように説明される。すなわち、Z 地域に向けて X 地域から接触性伝播が起こる。Z 地域では X 地域の共通語形を受容するが、下位場面の方言語形はそのままに、受容した共通語形を上位場面に位置づける。その結果、Y 地域のような状態が生じる。その後、上位場面の共通語形は下位場面にも進出し、結果として、場面に関わらず共通語形を使用する X 地域と同じ状態に至る。



共通語形の「地を這う伝播」の様子は、図 1~3 などのグロットグラム調査や図 4 のような狭域地図などによっても把握された事例がある。図 3 のグロットグラムでは、上位場面と下位場面の両方が設定されており、上の図のような変化が具体的にとらえられている。

**伝播の時期的問題**：ところで、佐藤はこうした共通語形の伝播の時期的な側面について、次のように言及している。

少なくとも『日本言語地図』の時代（同書で調査対象とした人たちの言語形成期、すなわち、明治末～大正初期から調査当時〈昭和 30 年代〉にかけて）における共通語形の伝播は、いわゆる「地を這うような」方言形の伝播とかなり類似する面があると言えよう（テレビ・ラジオの影響が戦前と比較にならない現時点における共通語の伝播にも地域性があるかどうかについては、また別に調査してみるべきである）。（佐藤 1986、152 頁）

テレビの普及は 1960 年代に入ってからであり、『日本言語地図』の調査は、それ以前、ないしはそれと重なる 1957 年から 1964 年にかけてであるから、佐藤の指摘は説得力があるように思われる。

ただし、それ以降の状況については、佐藤も言うように十分考えてみなければならない。例えば、先のグロットグラムが示すように、現代に近い時代においても共通語形の「地を這う伝播」の様子が認められる地域がある。図 3 の場合、調査は 1980 年前後の調査であり、70 歳代から 10 歳代の話者たちに、共通語形の「地を這う伝播」をうかがわせる斜めの線が現れている。

この点については、各地のグロットグラムの様相を総合的に把握したり、新旧の方言地図を比較したりすることでなお考えてみたいが、ひとつの予測として、項目や地域によつては、つい最近まで、いわゆる共通語化が理解語彙のレベルにしか及ばず、上位場面も含めて、使用語彙としては共通語形を用いないという状況が続いていたのではないかと思われる。「空から降る伝播」は知識としての共通語形を全国に振りまいたが、それは理解語彙のレベルにとどまるものであり、使用語彙のレベルの共通語化には、周囲の地域からの「地を這う伝播」が有効であった可能性が考えられるのである。この点に関して、アクセント共通語化について語った馬瀬良雄（1965）の発言は示唆的である。

小田切少年層のアクセント変化の方向は、優勢な長野市街地若年層への同化と見ることができる。共通語化と見えたのも、共通語アクセントの小田切への直輸入ではなく、市街地の閥門を通り、そこで新しい勢力として地盤を獲得したもののみが、小田切方言の共通語化に影響を及ぼす。（引用は『論集日本語研究 10 方言』有精堂、166 頁）

#### 4. まとめと課題—分布と伝播の諸相

以上、述べてきたことをまとめると次のようになる。

- ① 併用処理された共通語形を復活させると、その分布は、全国一律に現れるのではなく、LAJ の共通語形の分布の周辺部に出現する。
- ② これは、共通語形は空から降るように伝播するという従来の見方では説明できないものであり、共通語形も「地を這う伝播」（接触性伝播）によって普及すると言える。
- ③ そのような伝播においては、共通語形は、まず上位場面に入り込み、その後、下位場面に進出することで伝播が前進すると考えられる。
- ④ マスメディアや教育等による「空から降る伝播」は、知識としての共通語形を全国に振りまいたが、使用語彙のレベルの共通語化は周囲からの「地を這う伝播」によって行われるという状況が、つい最近まで続いていた可能性がある。

LAJにおける共通語形の伝播が、方言語形と同様に説明できるということになると、共通語形のそうした面での特徴をあえて検討する必要はないことになる。しかし、そのように速断することは待った方がよい。想像で言えば、共通語形の伝播速度は一般の方言語形よりも早いのではないか。あるいは伝播様式の問題として、都市間を優先的に伝播する「飛び火的伝播」（階層性伝播）が認められやすいのではないか。こうした点を検討した上で、方言語形の伝播との違いを確認していくべきである。

今回の考察は多分に原理的な内容であり、あらためて作成した地図をもとに、分布の特徴を綿密につかむことから始めなければならない。その際には、分布の広がり具合や位置、形状、およびそれに関わる社会的要因などの分布論的な観点と、接触を起こす共通語形と方言語形との言葉としての関係を見る言語的観点とが重要になってこよう。

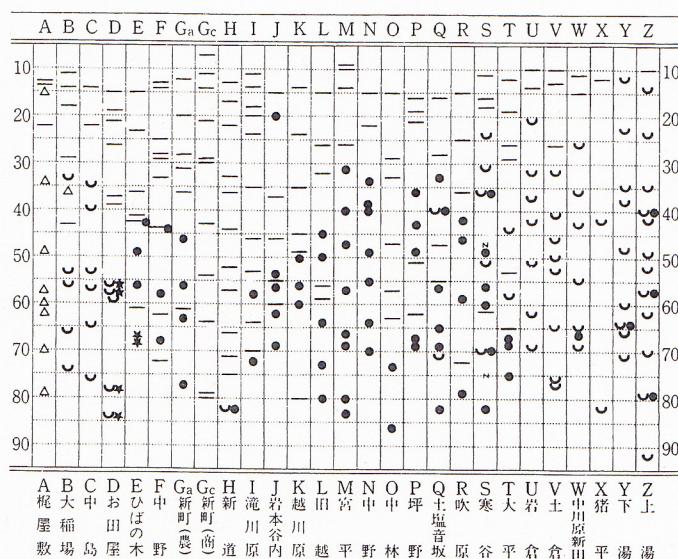
今後、論を進めていきたい。

## 文 献

- 井上史雄（1983）「山形県内陸地方の《新方言》」井上史雄編『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究－東京・首都圏・山形・北海道』科研費報告書
- 岸江信介・中井精一・鳥谷善史編、真田信治監修（2009）『大阪のことば地図』和泉書院
- 国立国語研究所（1966）『日本言語地図解説－方法－』大蔵省印刷局
- 佐藤亮一（1986）「地域社会の共通語化」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 8 方言研究の問題』国書刊行会
- 徳川宗賢（1985）「地域差と年齢差－新潟県糸魚川市早川谷における調査から－」国立国語研究所『方言の諸相－『日本言語地図』検証調査報告』三省堂
- 半沢康（2003）「現代の方言」小林隆・篠崎晃一編『ガイドブック方言研究』ひつじ書房
- 馬瀬良雄（1965）「アクセント変化の要因」『都大論究』5

## 図 1

表24 蝦蛄 — オタマジャクシ



## 図 3

(テレビ場面)



(家場面)



図 5 方言形衰退の場面差と地域差

(井上史雄 1983 の図を改変)

## 図 2

市町村	地点	70代	50代	40代	30代	20代
福	楢葉町	○	○	○	○	○
	木戸	○	○	○	○	○
	広野町	○	○	○	○	○
島	久ノ浜	○	○	○	↑	↑
	四ツ倉	○	○	○	↑	○
	いわき市	○	○	○	↑	↑
県	湯本	○	○	○	↑	○
	泉	○	↑	○	○	↑
	勿来	○	○	○	○	○
茨	大津港	↑	○	○	↑	○
	磯原	↑	○	↑	↑	↑
	高萩市	↑	○	○	↑	○
城	十王町	○	↑	○	↑	○
	日立市	○	↑	○	↑	↑

《凡例》  
○ ナンボ  
↑ イクラ

図3 共通語形の普及の地域差

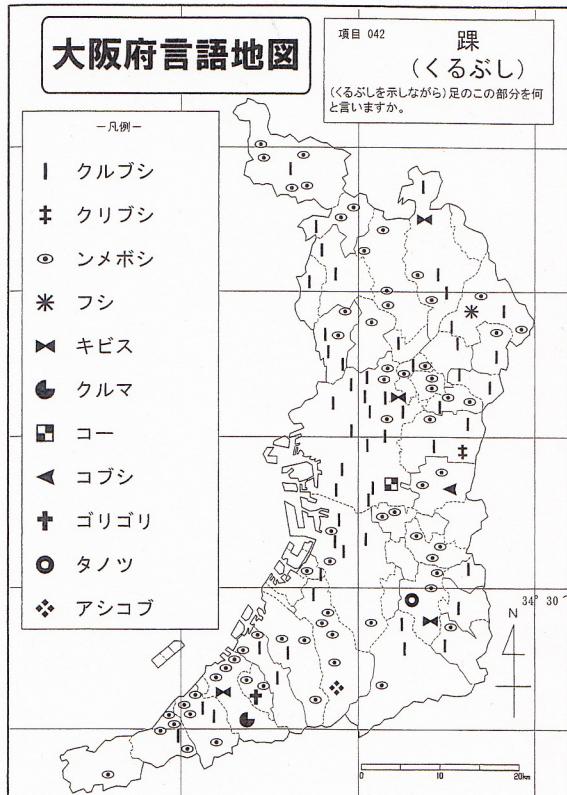
## 図の出典

図1 徳川宗賢 (1985)

図2・図3 半沢康 (2003)

図4 岸江信介ほか (2009)

## 図 4



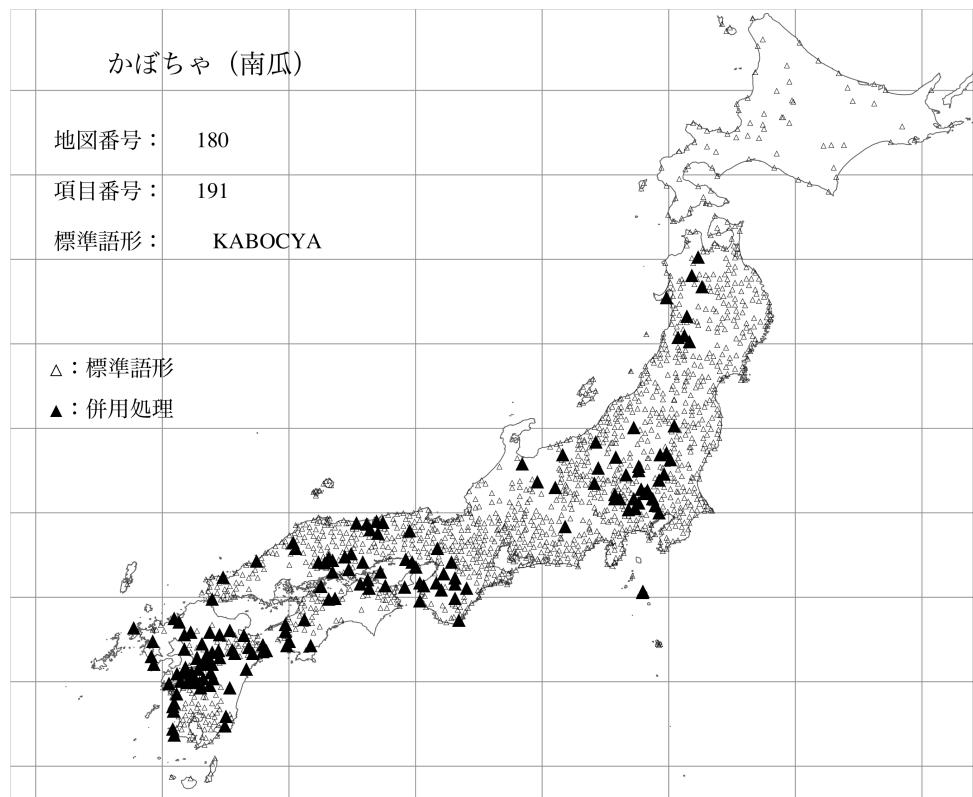


図5 標準語形と併用処理：かぼちや

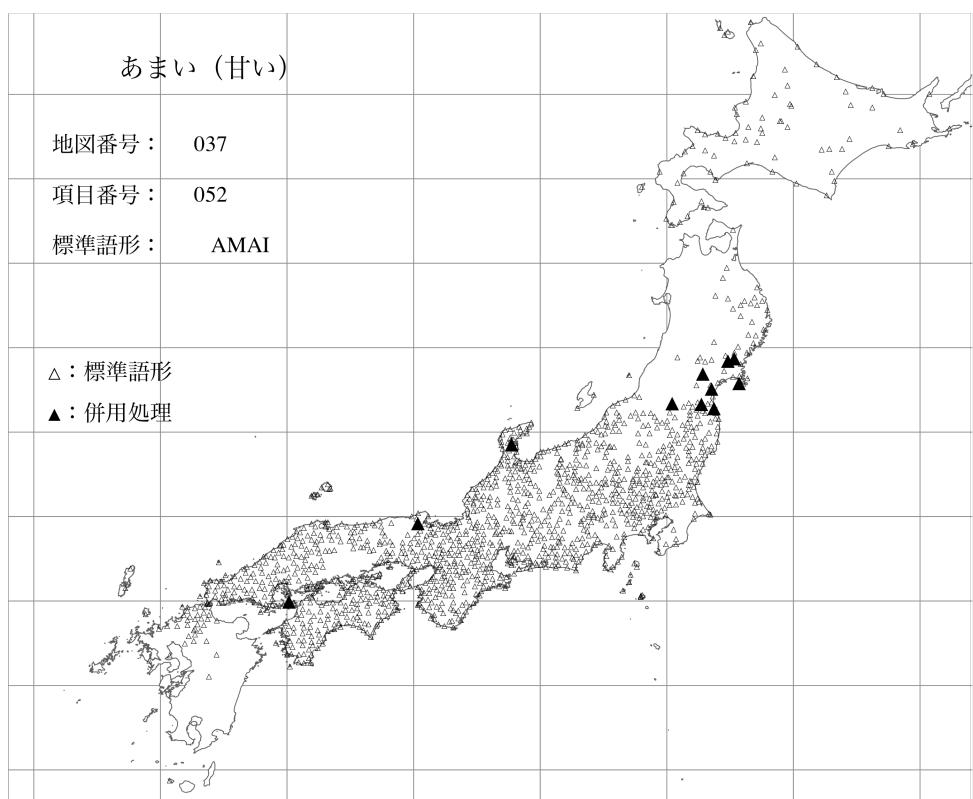


図6 標準語形と併用処理：あまい

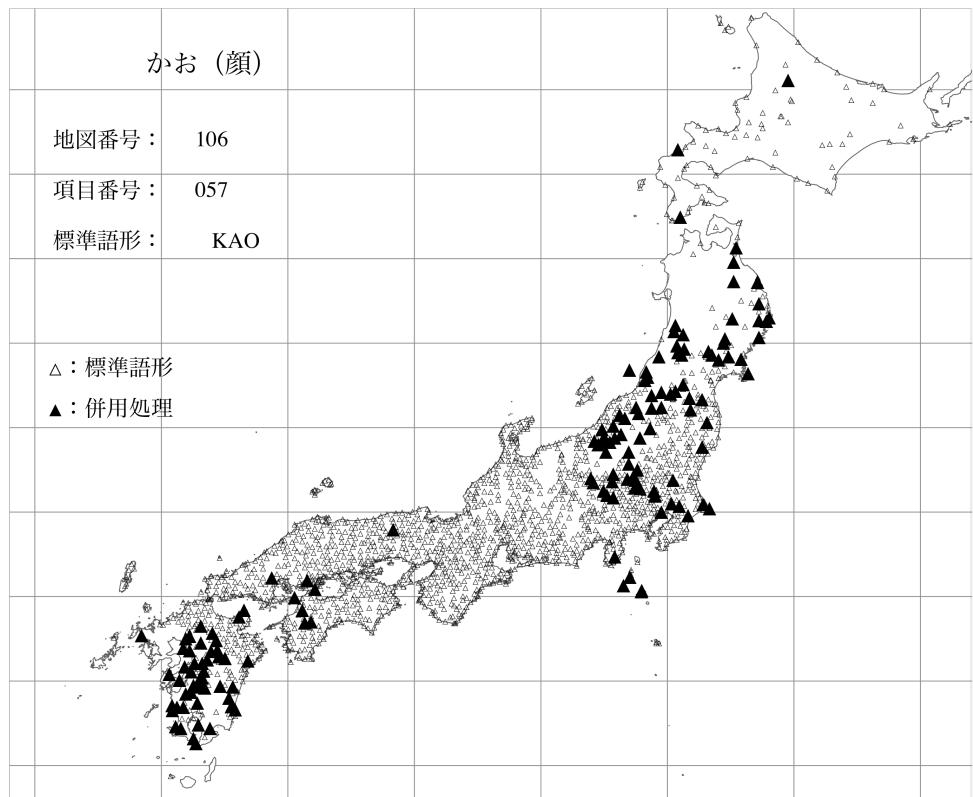


図 7 標準語形と併用処理：かお

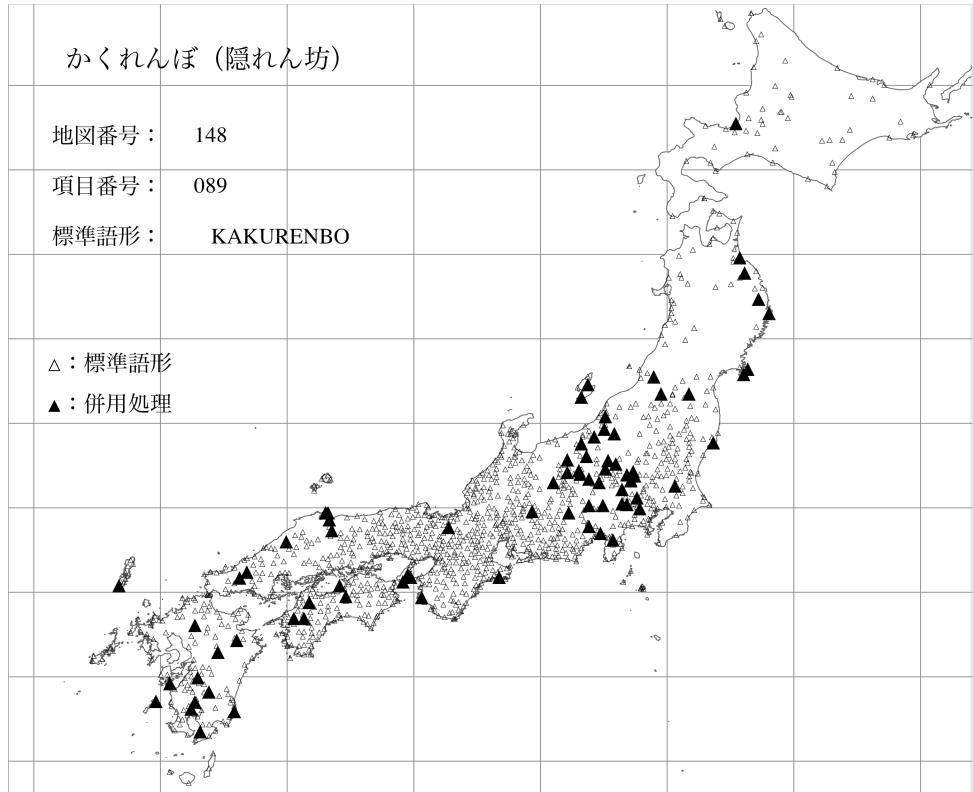


図 8 標準語形と併用処理：かくれんぼ

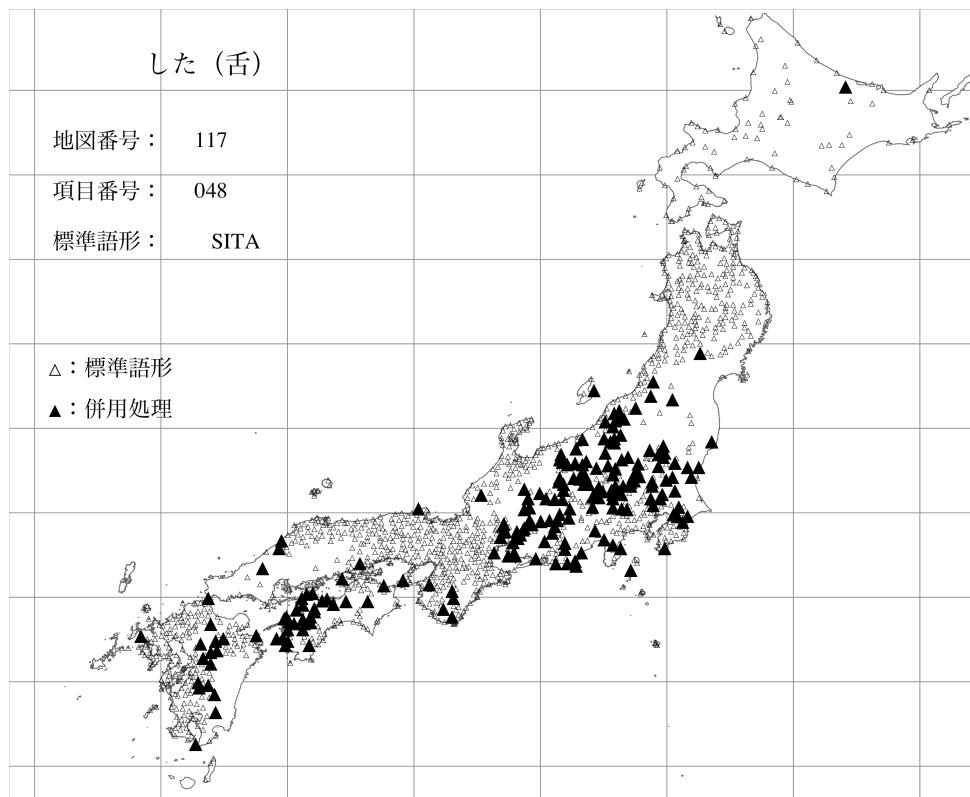


図9 標準語形と併用処理：した（舌）

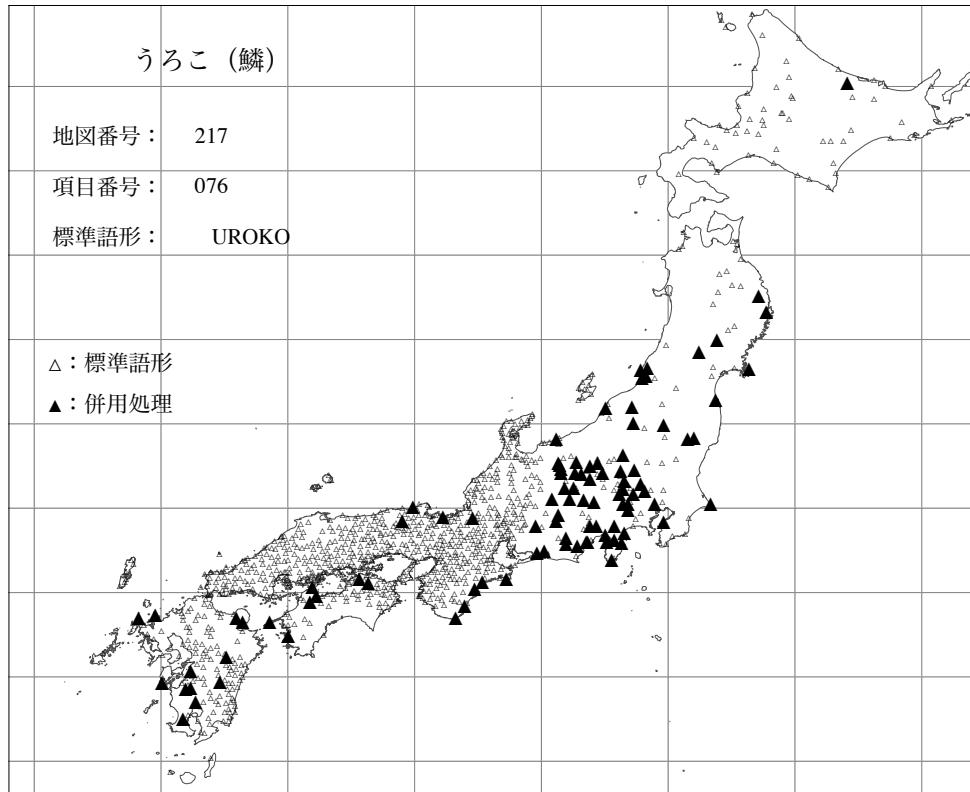


図10 標準語形と併用処理：うろこ

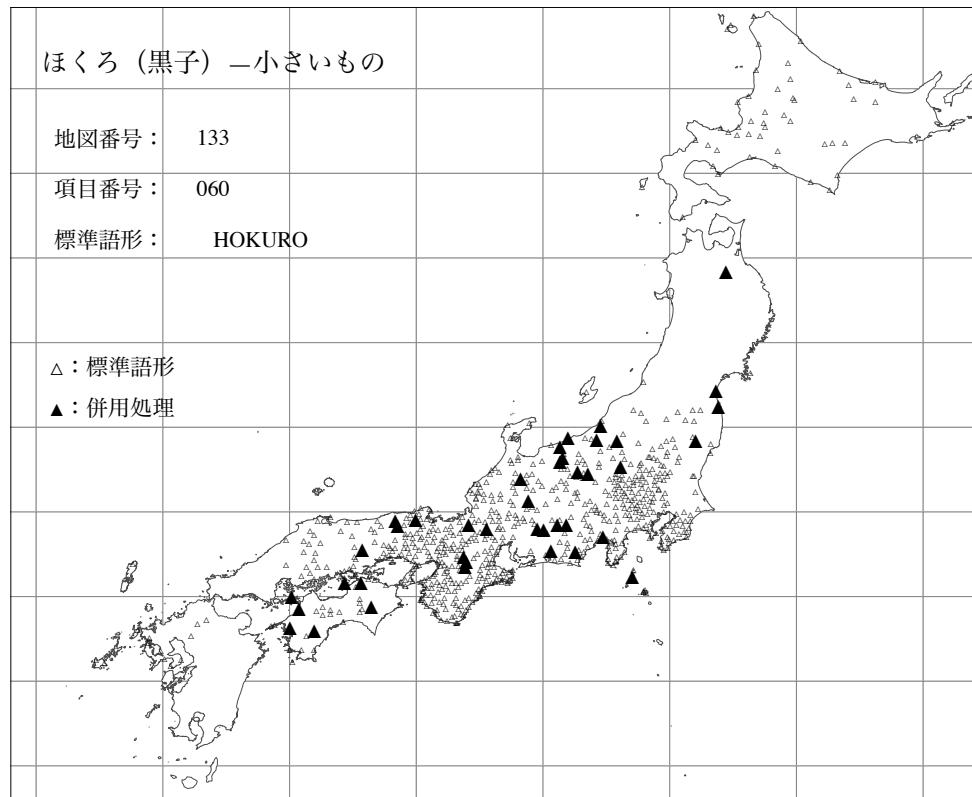


図 1 1 標準語形と併用処理：ほくろ（黒子）—小さいもの

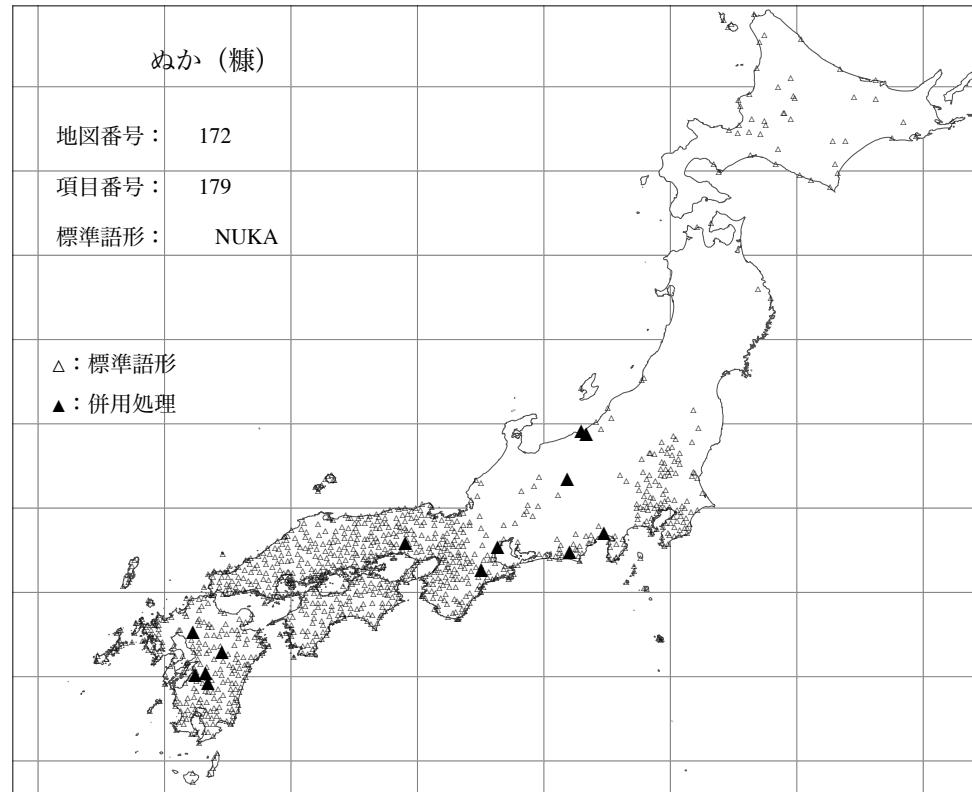


図 1 2 標準語形と併用処理：ぬか（糠）

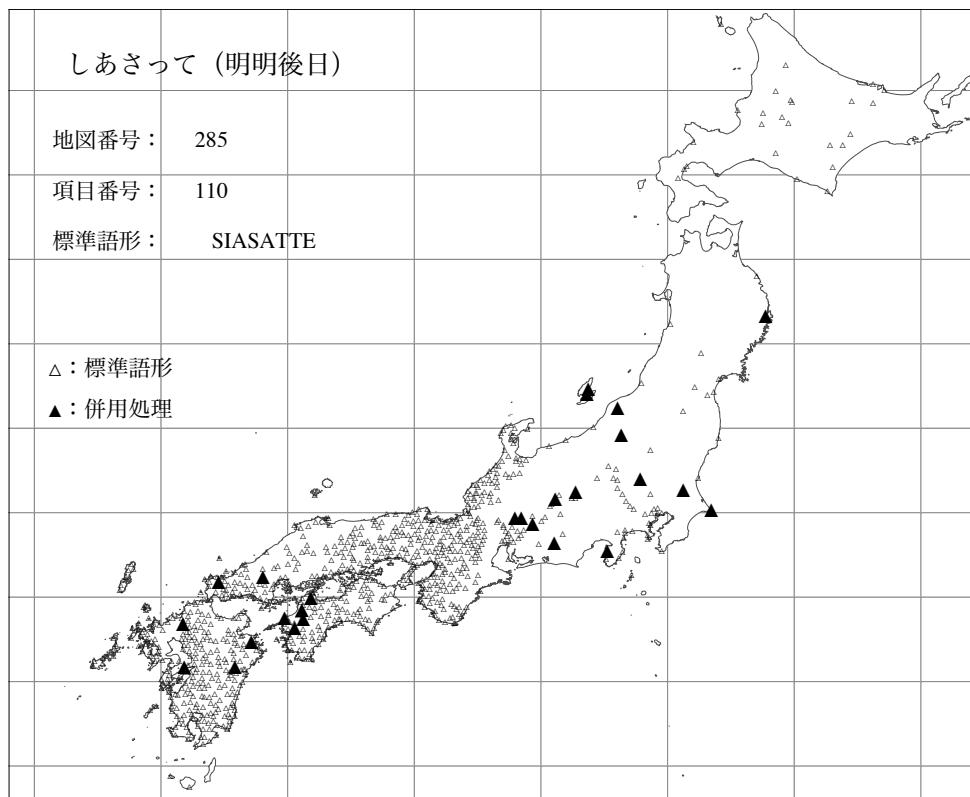


図 13 標準語形と併用処理：しあさって（明後日）

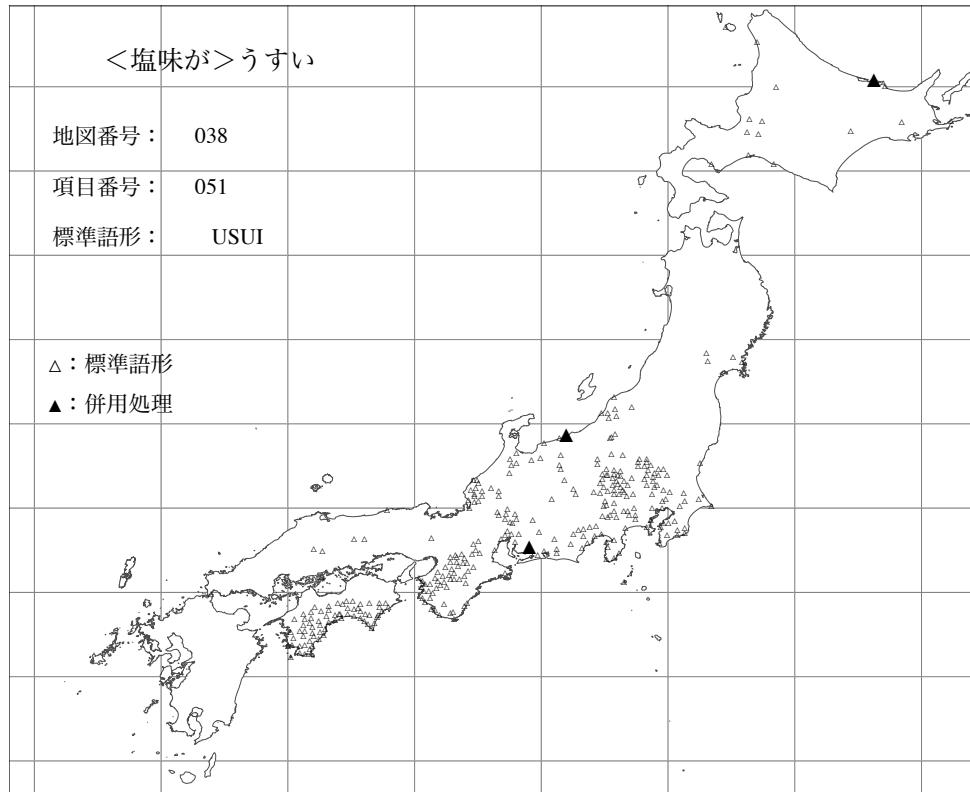


図 14 標準語形と併用処理：<塩味が>うすい

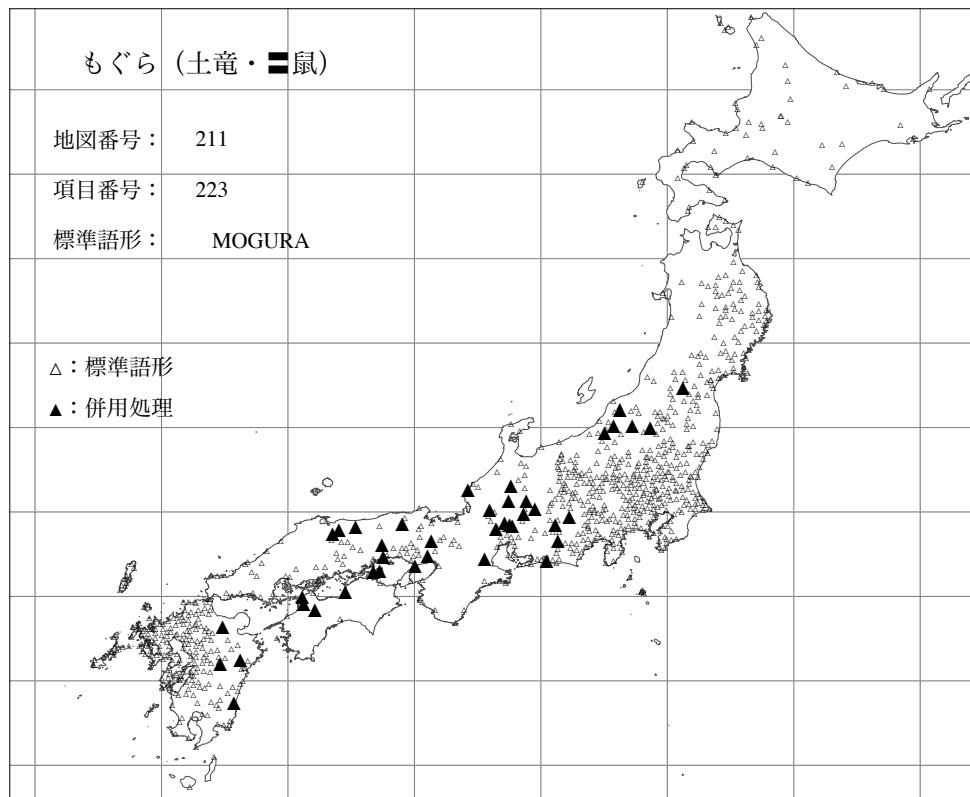


図15 標準語形と併用処理: もぐら (土竜・=鼠)

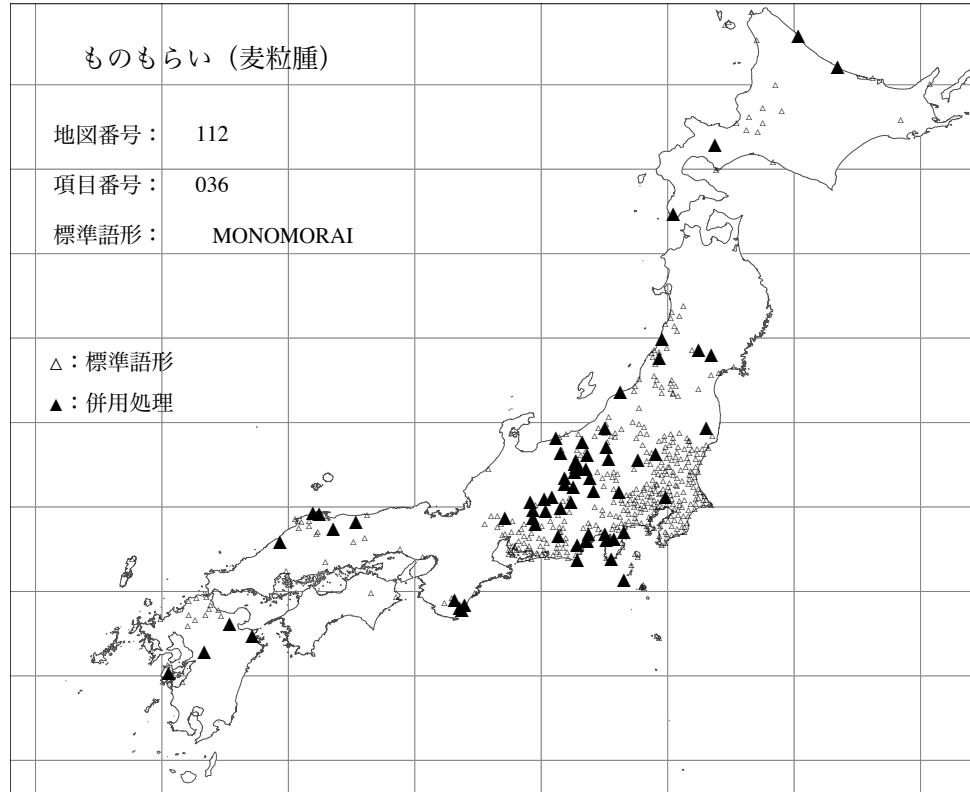


図16 標準語形と併用処理: ものもらい (麦粒腫)

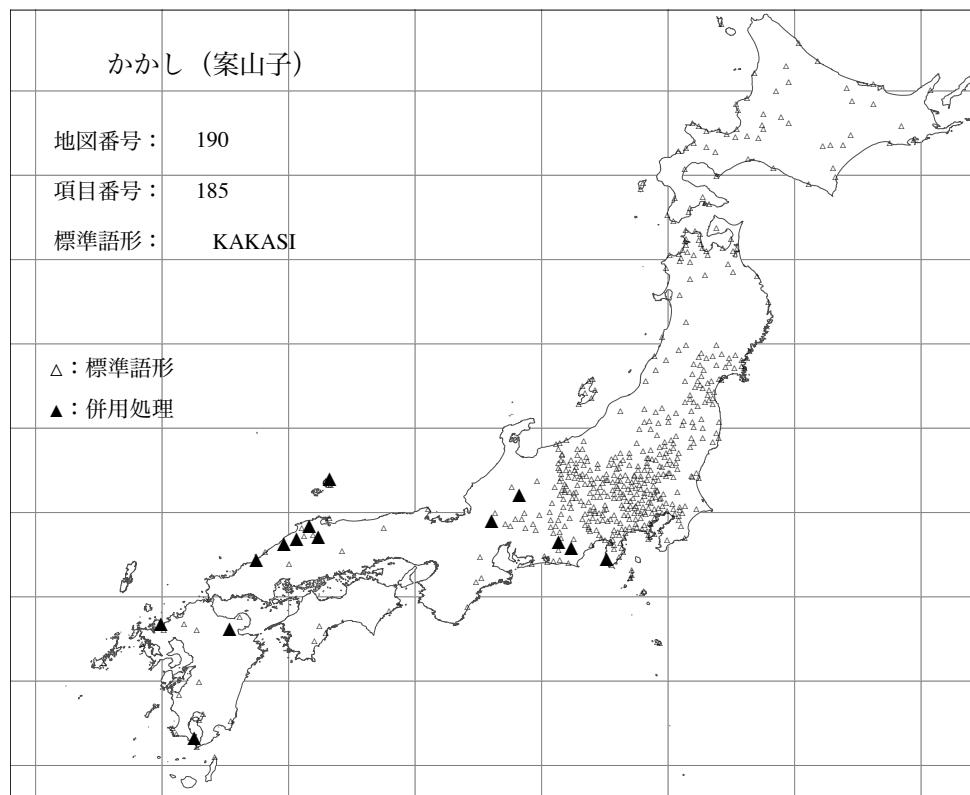


図 17 標準語形と併用処理：かかし (案山子)

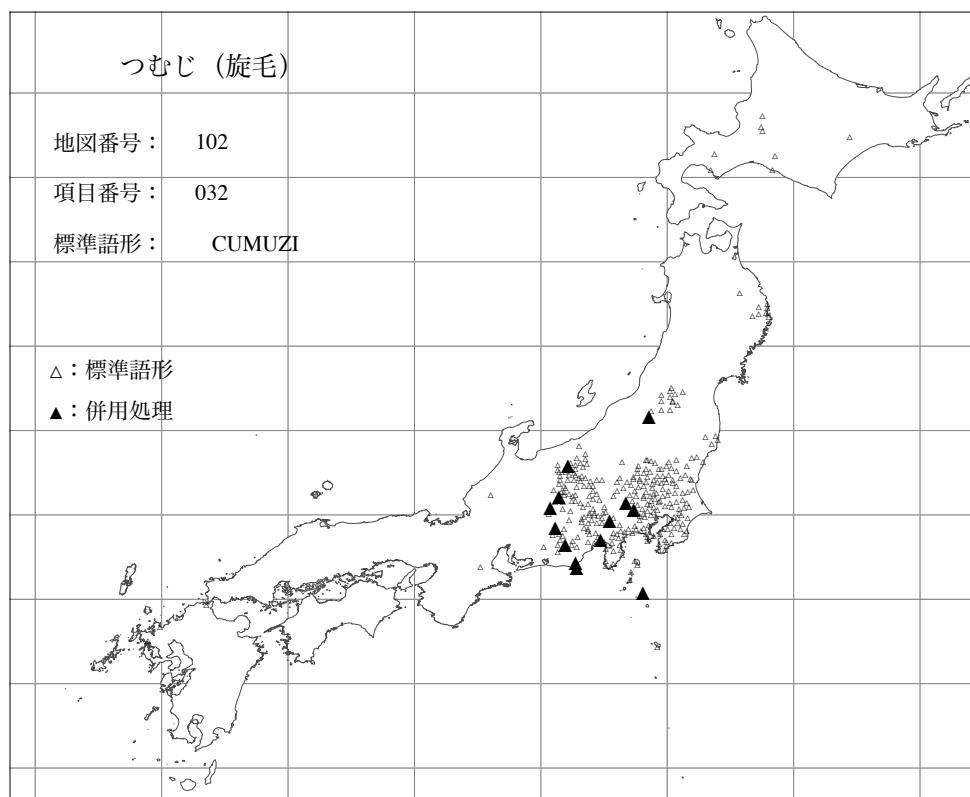


図 18 標準語形と併用処理：つむじ (旋毛)

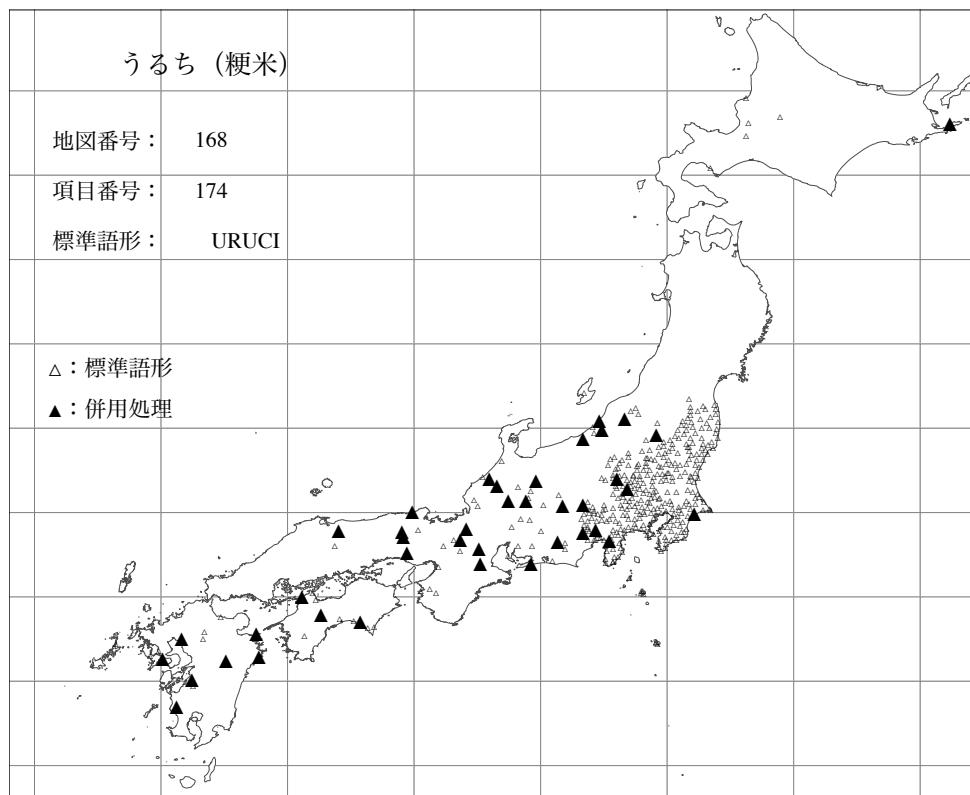


図 19 標準語形と併用処理 : うるち (粳米)

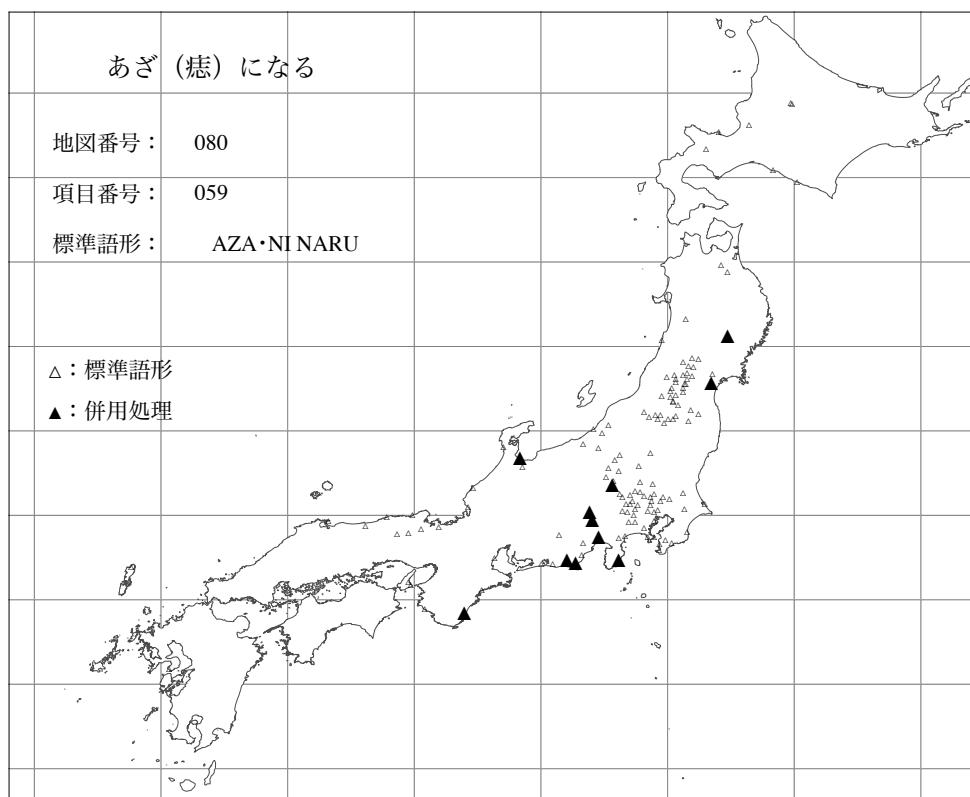


図 20 標準語形と併用処理 : あざ (痣) になる